Lesson 16　消えた大屋根と庇。

春には軒先の縁側で、ぽかぽかと日差しを楽しむ。
夏は庇の下や、天井の高い土間玄関で、ひんやりと涼を得る。

伝統的な日本家屋が持つ四季折々の原風景も、進行する住宅地の都市化と敷地面積の狭小化によって、どこか遠い昔のおとぎ話へと変化してしまいました。

<写真　首里城書院の間の縁側>

現代では庇のない陸屋根の住宅建築もたくさん見られるようになり、いきおい日射遮蔽の主役は窓ガラスに取って代わられることになりました。日射遮蔽型のガラスは夏の暑さ対策としては大変有効な手段なのですが、「サングラスをした窓」は本当に日本の住生活を満足させてくれるのでしょうか？

先日シンガポールで蒸暑環境下における室内環境創生について議論する機会がありました。四季のない蒸暑地域では暑さ対策が最優先され、とりわけガラスの遮熱性能が重要視されることは議論の余地のないところです。
でも、快晴の日に窓辺に佇んでも全く暖かさを感じない縁側空間。これが本当に日本の住宅に求められる体験なのか、いささか疑問に感じてしまいます。

＜写真　シンガポールのハーバー地域にあるビル群＞

太陽の恵みと強大な力を常に感じつつ、日射と仲良く暮らしていく住まい。四季の変化に対応した日射の調整は、窓の遮熱性能だけでは実現不可能です。深い庇、葦簀やすだれ、障子や鎧戸が果たしてきた役割を、現代の建築技術はどのような機構に置き換えていけば良いのでしょうか？

＜写真　屋内庭園を持つレストランの縁側＞

常に変化する住まい手の要求。時事刻々と変化する自然環境。これらをつなぐのは、変化することができる建築以外にないような気がします。伝統的な家屋建築の知恵をもう一度見直しつつ、IoT 技術なども活用しながら豊かで健康的な環境を創出していかなくてはならない時代です。

一つの技術で全てを解決するのではなく、使い方などソフトを含めた技術の総合化がこれからの住宅建築を支えていく鍵になりそうです。

＜プレミアムパッシブハウスの建築化外構と庇＞

室内気候研究所　主席研究員
工学博士　石戸谷 裕二
■公式HP： http://iwall.jp
■ブログ：http://blog.iwall.jp